

# なみなみ通信

福岡県水産海洋技術センター情報誌  
なみなみ通信は、水産海洋技術センターからの情報を、漁業者や県民の方々にお知らせする情報誌です。

## VOL.73

発行/令和3年1月



矢部川産の天然アユ

### 調査・研究情報

- 改正漁業法下で資源評価対象種が拡大…………… 2
- 有明海のアサリ採苗手法の実証…………… 3
- 豊前海におけるナルトビエイの移動経路…………… 3
- アユ種苗の放流方法を改良…………… 4

### 普及だより

- 「じさかなび福岡」でテイクアウト情報等を発信…………… 4

### 福岡県水産海洋技術センター

〒819-0165 福岡市西区今津 1141 番地 1

TEL:092-806-5251 FAX:092-806-5223

センターホームページ <http://www.sea-net.pref.fukuoka.jp/>

## 調査・研究情報

### 改正漁業法下で資源評価対象種が拡大

「70年ぶりの抜本改正」といわれる改正漁業法が、令和2（2020）年12月1日に施行されました。

改正漁業法では、水産資源がどのような状況にあるかを評価（資源評価）することとされており、国では、資源評価の対象魚種を当初の50魚種から令和5（2023）年度までに200魚種に拡大することを掲げています。

一方、資源管理は、TAC（漁獲可能量）による管理が基本とされ、令和5年度までに現行TAC魚種<sup>※1</sup>に加えて、新たに15種が候補として選定されています。現行8魚種については、資源の状況や本県の漁獲量から従前と概ね同様の管理となる見込みですが、新たな15種については、本県の主要魚種（ブリ、サワラ、マダイ、ヒラメ、トラフグ）も含まれており、資源状況によっては、配分数量に基づいて管理を行うことも想定されます。

さて、資源管理を行うためには、まずは、資源評価を行う必要があります。このため、県では、対象魚種の漁獲量や海洋環境などの情報を収集し、国立研究開発法人水産研究・教育機構や他県と連携して資源評価に取り組んでいるところです。

具体的にはマアジを例にとると、本県では、マアジの漁獲量はもとより、漁獲されたマアジの体長組成や成熟状況、卵稚仔の出現状況などを調査しています。国立研究開発法人水産研究・教育機構が、本県や他県の調査結果を集約し、マアジ資源の評価を行っています。

資源評価に必要な調査については、漁業関係者皆様のご協力が不可欠となりますので、今後とも一層のご協力をお願いします。

※1 現行TAC魚種は、マアジ、マイワシ、サンマ、クロマグロ、スケトウダラ、スルメイカ、マサバ・ゴマサバ、ズワイガニ。



漁獲物測定の様子

（水産海洋技術センター資源情報課）

## 有明海のアサリ採苗手法の実証

アサリは有明海の重要な漁業対象種ですが、資源変動が大きいことからその安定化が課題となっています。そのため、県では効率的に稚貝を確保し、母貝まで育成させることができる網袋設置の取組みを行っています。

有明海研究所では、袋網にはこれまで砂利を入れていましたが、アサリの採苗効果を高めるため、袋網に入れる素材の検討を行いました。その結果、新たな天然採苗基質として注目をあびているパーム椰子の実の繊維を網袋に添加することで、採苗効果が高まることがわかりました。

今年度からは、この手法を実証するため、12月から1月に大牟田市地先の干潟に7,000袋の網袋を設置し、そのうち半数の網袋にパーム椰子の繊維を添加しました。今後は定期的に網袋内の状況を観察し、両者の採苗効果を比較検証することとしています。設置した網袋には来年春にはアサリの稚貝が着底し、1年後には殻長2cm以上に成長し、産卵することが期待されます。



網袋設置状況（左：設置状況、右：砂利にパーム椰子繊維を加えた網袋）

（有明海研究所資源増殖課）

## 豊前海におけるナルトビエイの移動経路

ナルトビエイ（図1）は、国内では九州沿岸域や瀬戸内海を中心に生息し、貝類を大量に捕食するなど、深刻な漁業被害をもたらしています。

豊前海研究所では、豊前海における食害実態把握のため、200尾を超えるナルトビエイの胃内容物を調査した結果、マテガイ、バカガイ、アサリ、アカニシ等の貝類を大量に捕食していることがわかりました。

また、水温や水深を記録できる標識を付けて放流した個体が1年後に再捕され、そのデータを解析すると、2.5~200mと福岡では存在しないかなり深い水深が記録されていることから、他の海域に移動していると推定し、他県の水温や水深のデータも時系列で解析した結果、図2に示した移動経路が推定されました。

研究所では、今回の知見を活用し、山口、大分等関係県と連携して、効果的な駆除を進めていきます。

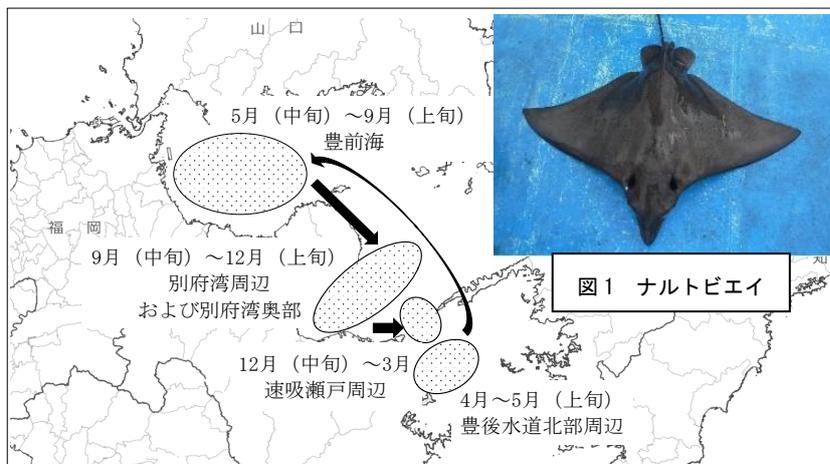


図2 推定されたナルトビエイの移動生態

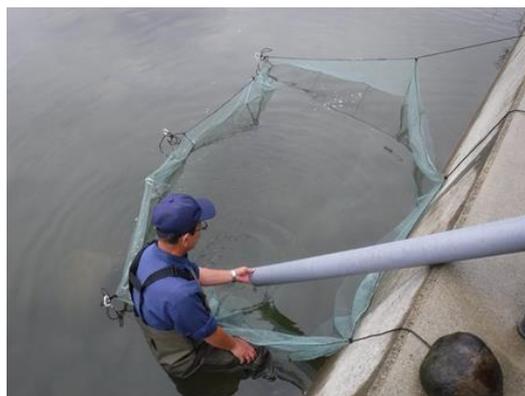
（豊前海研究所浅海増殖課）

## アユ種苗の放流方法を改良

アユは内水面漁業の重要魚種ですが、近年の豪雨の影響により、産卵場が土砂で埋まる等河川環境が悪化しています。このため、県では内水面漁連や漁協と連携して産卵場造成や受精卵放流に取り組んでいます。

10月頃に産み付けられたアユの卵は、ふ化後は海にくだり稚アユに成長し、翌年の3～4月頃に川を遡上しますが、この時期はアユを食害するカワウも多く出没するようになります。カワウなどにより、天然の稚魚に限らず、放流種苗も多く食害されています。アユの稚魚を放流する際はトラックの水槽からホースで直接川に放流しますが、放流直後の稚魚は1～2時間経過しても放流場所近辺で群となり、かたまって泳ぎ、カワウからの食害も受けやすい状況となります。

このため、内水面研究所では、放流直後の稚アユの食害を軽減するため、放流場所の水面に仮設置した生け簀の中でアユ稚魚を一定時間収容し、川の環境に慣れさせたあとに河川に放流する馴致放流という新しい放流手法の開発に取り組んでいます。この手法では、馴致後、生け簀を開くとたちまち周辺に分散し、カワウの食害を受けにくくなります。県では今後も放流方法等の研究を進め、アユの資源づくりに取り組んでいきます。



放流アユを生け簀で馴致する様子

(内水面研究所)

## 普及だより

### 「じざかなび福岡」でテイクアウト情報等を発信

県では、令和元年度より、県産水産物の産地情報や、「ふくおかの地魚応援の店」の紹介などを発信するウェブサイト「じざかなび福岡」を開設しています。

このような中、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う飲食店の休業やイベントの中止等により、県産水産物の消費が大きく落ち込むことが懸念されました。そこで、県では、令和2年4月に「じざかなび福岡」内に、テイクアウトやデリバリー等に取り組む「ふくおかの地魚応援の店」を紹介する特設ページを開設し、県産水産物の消費喚起に努めています。今後とも、県産水産物の消費拡大に向けた取組みを進めていきます。



「じざかなび福岡」ホームページ

(水産海洋技術センター企画経営課)